

請願について

都立高校改革推進計画に基づく、夜間定時制課程の閉課程に関する請願について、下記のとおり報告する。

記

1 請願者

小山台高校定時制の廃校に反対する会
都立立川高等学校芙蓉会（定時制同窓会）
立川高校定時制の廃校に反対する会
代表 相田 利雄 様

2 請願事項

小山台高校定時制と立川高校定時制を閉課程とした2016年の計画を白紙に戻し、両校の存続を決定してください。

3 請願理由

小山台高校定時制と立川高校定時制は、都民の貴重な財産である。小山台高校定時制は、外国につながる生徒が多く在籍し、多文化共生の教育を進めている。立川高校定時制は、約180人の生徒が在籍する都内最大規模の定時制高校である。両校とも交通の便も良く、創立80年を超え、地域の人々に支えられている。

夜間定時制高校は、少人数で、丁寧な学習指導が行われている。貧困と格差が拡大し、「ヤングケアラー」が増大するなかで、小池都知事も、多様な学びを保障するセーフティネットの役割を果たしていることを認めている。また現在、外国から働きに来ている保護者が義務教育を終えた子どもを日本に呼び寄せる例が多くなっている。教育委員からは、その実態を調査し、教育を保障すべきだとの指摘がなされている。こうした子どもたちの学びと生活を保障するために、夜間定時制の果たす役割は大きくなっている。

東京都教育委員会が両校の閉課程を中止し、生徒が安心して学べるよう、一刻も早く存続を決定することを求める。

4 回答

別紙1のとおり

4 教学高第 号
令和4年10月 日

小山台高校定時制の廃校に反対する会
都立立川高等学校芙蓉会（定時制同窓会）
立川高校定時制の廃校に反対する会

代表 相田利雄様

東京都教育委員会

請願について（回答）

令和4年9月9日付けで提出された請願について、下記のとおり回答します。

記

東京都教育委員会は、平成31年2月14日に開催された平成31年東京都教育委員会第3回定例会において、都立高校改革推進計画・新実施計画（第二次）を策定し、この中で平成28年2月の都立高校改革推進計画・新実施計画と同様に、小山台高校及び立川高校の定時制課程を閉課程することを決定しています。

このことについて、新実施計画策定後、夜間定時制課程の入学者選抜の状況は、平成28年度から令和4年度までにかけて募集人員は750人減っていますが、第一次募集の応募倍率については、平成28年度は0.38倍、平成29年度は0.39倍、平成30年度は0.40倍、平成31年度は0.37倍、令和2年度は0.34倍、令和3年度は0.30倍、令和4年度は0.25倍と推移しております。第一次募集の応募者数は、平成28年度は912人、平成29年度は799人、平成30年度は794人、平成31年度は655人、令和2年度は587人、令和3年度は519人、令和4年度は427人と減少しており、さらに、第二次募集における応募者が平成30年度以降、大幅に減少し、入学者数の減少が顕著となっております。

このため、東京都教育委員会は、都立高校改革推進計画・新実施計画（第二次）の着実な実施により、チャレンジスクールの新設等を行い、その進捗や夜間定時制高校の応募倍率の推移などの状況を考慮しながら、小山台高校及び立川高校の夜間定時制課程を閉課程し、都立高校定時制課程の改善・充実を進めていきます。

【閉課程する理由】

夜間定時制課程を当初から希望する生徒の入学者選抜応募倍率は、平成23年度には0.63倍でしたが、令和4年度には0.25倍と更に低下しています。

また、夜間定時制課程は、セーフティネットの機能を果たしていますが、募集人員

に対する在籍生徒の割合は、平成23年度以降年々低下し、平成27年度では定員の68.6%、令和4年度には、この間、定員が減少しているにもかかわらず31.5%まで減少しています。その上、夜間定時制課程には、昼間に学校に通うことができない勤労青少年の学びの場として、昭和40年度には夜間定時制課程に進学した生徒のうち勤労青少年は88.3%でしたが、平成13年度の夜間定時制課程に在籍する全生徒のうちでは7.0%に、令和4年度は2.7%にまで低下しています。

その一方で、夜間定時制課程には、学習習慣や生活習慣等に課題がある生徒や、小・中学校時代に不登校を経験した生徒、外国人の生徒など、多様な生徒が在籍するようになってきました。こうした生徒の中には、昼夜間定時制高校やチャレンジスクールを希望していたものの、合格できずに夜間定時制高校に入学した生徒も多くいる状況です。このため、東京都教育委員会では、このような生徒や保護者のニーズに対応すべく、チャレンジスクールや昼夜間定時制を設置し、規模拡大に取り組んできましたが、令和4年度入学者選抜においても、チャレンジスクールの応募倍率は1.22倍であり、入学希望に十分に答えられていない状況があります。

東京都教育委員会では、「都立高校改革推進計画・新実施計画」及び「都立高校改革推進計画・新実施計画（第二次）」において、昼夜間定時制高校とチャレンジスクールの夜間部の規模拡大やチャレンジスクールの新設を行い、その進捗や夜間定時制課程の応募倍率の推移などの状況を考慮しながら、一部の夜間定時制課程を閉課程していくこととしています。また、全ての定時制高校において、スクールカウンセラーの配置拡大や勤務日数の拡充など教育相談体制の強化等を行い、定時制教育の充実を図ることとしています。

小山台高校定時制課程の入学者の状況は、平成27年度は26人、平成28年度は23人、平成29年度は22人、平成30年度は11人、平成31年度は13人、令和2年度は13人、令和3年度は10人、令和4年度は13人と低調な傾向にあり、募集人員に対する在籍生徒数の割合も低い状況にあります。

小山台高校の定時制課程の閉課程に当たっては、周辺の夜間定時制課程において、夜間定時制課程を希望する生徒を受け入れていきます。

また、立川高校定時制課程の入学者の状況は、平成27年度は90人、平成28年度は71人、平成29年度は91人、平成30年度は57人、平成31年度は51人、令和2年度は40人、令和3年度は41人、令和4年度は24人と減少傾向にあります。

立川高校の定時制課程の閉課程に当たっては、新たに開校するチャレンジスクールや周辺の夜間定時制課程において、夜間定時制課程を希望する生徒を受け入れていきます。

小山台高校定時制と立川高校定時制の
閉課程を中止し、両校の存続を求める請願署名

東京都教育委員会教育長 浜 佳葉子 様

■ 請願項目 ■

- 1・ 小山台高校定時制と立川高校定時制の閉課程とした2016年の計画を白紙に戻し、
両校の存続を決定してください

2022年9月9日

小山台高校定時制の廃校に反対する会
都立立川高等学校芙蓉会(定時制同窓会)
立川高校定時制の廃校に反対する会
代表 相田利雄

連絡先

第一次分

9454 筆

(紙の署名) 8649 筆

(ネット署名) 805 筆

累計

9454 筆



小山台高校定時制と立川高校定時制の 閉課程を中止し、両校の存続を求める請願署名

東京都教育委員会教育長 浜 佳葉子 様

■ 請願項目 ■

1・ 小山台高校定時制と立川高校定時制の閉課程とした 2016 年の計画を白紙に戻し、
両校の存続を決定してください

2022年10月4日

小山台高校定時制の廃校に反対する会
都立立川高等学校芙蓉会(定時制同窓会)
立川高校定時制の廃校に反対する会
代表 相田利雄

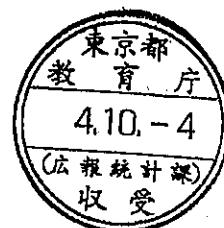
連絡先

第二次分 459 筆

(紙の署名) 459 筆

(ネット署名) 筆

累計 9913 筆



小山台高校定時制と立川高校定時制の 閉課程を中止し、両校の存続を求める請願署名

東京都教育委員会教育長 浜 佳葉子 様

■ 請願項目 ■

- 1・ 小山台高校定時制と立川高校定時制の閉課程とした2016年の計画を白紙に戻し、両校の存続を決定してください

2022年10月18日

小山台高校定時制の廃校に反対する会
都立立川高等学校芙蓉会(定時制同窓会)
立川高校定時制の廃校に反対する会
代表 相田利雄

連絡先

第三次分

138 筆

(紙の署名) 10 / 筆

(ネット署名) 37 筆

累計 10,051 筆



教育長 洪佳葉子様

小山台高校定時制課程の存続についてのお願い

私たちは都立小山台高校定時制課程の存続を求め、今年もまた新たな署名 9454 筆を東京都教育委員会に提出しました。

教育委員のみなさまには毎年このような形で訴えてきましたので、繰り返しになる方もいらっしゃると思いますが、今年もお読みいただき、私たちの思いを受け止めていただければ幸いです。

2021年3月9日の都議会予算特別委員会で、小池都知事は「夜間の定時制高校につきましては、勤労青少年だけではありません。お話ありましたように、今日では、不登校を経験した生徒、そして外国人の生徒などの学びの場となっている、そして、きめ細かな指導を行うなど、社会人としての自立を促す、その上で重要な役割を果たしていると認識をいたしております。」と答弁しました。その外国人の生徒などの最も大事な学びの場になっているのが小山台定時制です。

私たちが小山台高校定時制の存続を求めている理由は以下の2点です。

(1) 小山台定時制の多文化共生の教育を希望する生徒の行き先がなくなってしまいます。多文化共生の教育活動は小山台高校定時制ならではのもので、歴史と実績を積み重ねてきました。外国籍あるいは外国につながる生徒が半数以上在籍し、学校そのものが多文化共生の場になっています。

2021年2月12日の都議会文教委員会で、とや議員が「小山台は現在、1年生は半数以上が外国籍、あるいは外国につながる生徒で、多文化共生教育に力を入れている。カリキュラムを教えて欲しい」と質問したことについて、都教委は「多様な文化、国籍をもつ生徒が共に生きることができるよう、人権感覚を高め、互いに尊重しあう心をもつことを目標にした教育活動を行っている。学校設定科目「市民」「多文化理解」を設置し、日本人と外国人が互いに尊重しあえる学習を行っている」と答弁しました。その通りです。今も変わりません。

ところが、「小山台の周辺でおなじように多文化共生教育を行っている定時制はあるか」という質問に対しては、「例えば、都立六本木高校では、チャレンジスクールの特性を生かし、日本語教育や多文化への理解を深める学習を行うための選択科目として、国際理解、環境と共生、実用国語などを設置しております。また、都立六郷工科高校定時制課程では、日本語指導が必要な生徒が早期に授業内容を理解できるようにするための選択科目として、ベーシック英数国を設置するとともに、放課後日本語教室を実施しております」と答弁しました。しかし、六本木や六郷工科は小山台と同じような「多文化共生教育」を行っているわけではありません。

小山台は学校設定の必修教科「市民」で、「共に生きる」「社会参加Ⅰ」「社会参加Ⅱ」という科目を4年間かけてすべての生徒が学習します。六本木は54ある自由選択科目の中に「いのちと性」「国際理解」「環境と共生」があるだけです。六郷工科は英数国の基礎的な講座を設けているだけです。小山台の「市民」に相当するカリキュラムを持っている学校はありません。3校のHPからプリントアウトした教育課程表を資料として添付しましたのでお確かめください。教育課

程で小山台に代替する学校はない、都立唯一といってよい学校をなぜ廃止するのか、私たちはこのことを一番問題にしています。

小山台に相当するカリキュラムを持った学校がないとすると、「代わりの選択肢として同等以上のことができる部分が近くで求められるのかどうかというのは、代替措置として大事なところではないかと思うのですが、それはもう万全であると思ってよろしいのでしょうか」という宮崎委員の発言（2017年10月12日教育委員会）に反するのではないのでしょうか。

（2）「交通が便利でチャレンジスクールや昼夜間定時制高校に通いやすいから（廃止する）」というのも理解できません。

他の対象校と違って小山台の場合、近くに新たなチャレンジ校をつくるわけではありません。既にある六本木高や一橋高に通いやすいというだけです。武蔵小山駅から六本木高校の最寄り駅まで電車一本で行けるのは確かですが、例えば大崎高校も一橋高校まで電車一本で行けるし、時間的にも同じようなものです。特に小山台高を廃止する理由になりません。

そもそも、交通至便な学校を「他の学校に通いやすい」という理由で廃止する意味がわかりません。小山台の生徒が武蔵小山駅近くに住んでいるわけではありません。いろいろな地域から電車の便などが良い小山台に通ってくるのです。武蔵小山から六本木や一橋に通いやすいからといって、小山台に通ってくる生徒がこれらの学校に通いやすいとは限りません。

何故“便利だから”廃校になるのでしょうか。武蔵小山駅から1分で行ける学校を廃止して、遠くにある学校に行けばいい、という考え方がわかりません。

小池都知事は先述の都議会で、「教育委員会が、これまでも丁寧に、その件につきましては説明をしてきたと、このように聞いております」と答弁しましたが、これは事実と違います。都教委は廃止の理由について、「勤労青少年が少ない」「チャレンジ校などへの希望者が多い」「近隣の学校で代替できる」…など定時制の一般論を述べるだけです。これらは夜間定時制高校すべてに該当します。その中で「なぜ小山台定時制なのか、なぜ立川定時制なのか」という理由が聞きたいのです。しかしこの質問には未だに回答がありません。どこが丁寧な説明なのでしょうか。

このまま募集停止にするのはあまりにも一方的で、無茶苦茶です。

私たちは、今年も10月に開催される教育委員会において、小山台高校定時制の新1年生の募集停止が予告されることを危惧しています。ぜひ、私たちの思いを聞いていただければと思い、今年もお手紙を差し上げました。よろしくお願いたします。

2022年9月9日

小山台高校定時制の廃校に反対する会
連絡先

東京都教育委員会 教育長 浜 佳葉子 様

都立立川高校定時制課程の存続についてのお願い

長引くコロナ禍のもと、教育委員の皆様におかれましては、日頃より学校教育発展のために率先してご尽力いただき、敬意を表するものです。

私たち立川高校芙蓉会（定時制同窓会）は、母校の持続的な発展のために影ながら尽力してまいりました。この間、芙蓉会として生徒募集に協力すべく、独自の学校案内パンフレットを作成し、立川市をはじめ八王子市、青梅市、国分寺市など周辺の18市町125の中学校に対して訪問活動をすすめ、緊急事態宣言後は郵送にて呼びかけを行うこともありました。生徒の進学先に悩んでいた、ある学校の進路担当の先生は「その手がありましたね」などと訪問を喜んでくださいました。

また、毎年取り組んでいる定時制高校の存続を求める請願署名は、今回1万筆に迫る方々の願いを集約し、提出いたしました（9月9日現在）。署名に取り組んだ会員の多くが「立定の卒業生であることを誇りに頑張ってきました」「先輩・後輩、みんなで築いてきた歴史と伝統の立定を残してください」「格差と貧困社会。学びのセーフティネットを無くさないで…」などの思いで署名を広げています。

私たちは、以下のような理由で立川高校定時制の存続を願っています。

(1) 現在、生徒数は160人が在籍しています。減ったとはいえ都内の夜間定時制普通科では最大規模の学校で、多摩地域随一の人気校です。今年度も24人が入学しました。

(2) 立川高校定時制が廃止されれば、立川市、八王子市、日野市では夜間定時制はゼロになります。現在、母校には八王子市から通ってくる生徒が最も多く、次いで立川市、武蔵村山市、東大和市、日野市などに居住しています。多くの生徒が運動部（バスケット、バドミントン、卓球など）や、文化部（軽音楽、演劇、イラストなど）に参加しており、午後9時55分までのクラブ活動に励んでおります。したがって、交通至便で立川駅から7～8分で通える学校を廃止して、遠くにある学校や立川地区チャレンジスクールに行けばいいという考え方は、勤労青少年らの希望を踏みにじる机上の空論です。

(3) 立川高校定時制は創立86年を迎え、歴史と伝統を積み重ねてきました。7年前に都教委による閉課程（廃止）計画に接し、在校生やPTA、卒業生、教員OBなどから存続を願う切実な声が寄せられました。こうしたことから芙蓉会（同窓会）として「定時制高校4校の存続を求める決議」を上げて、運動に取り組んできました。また、立定が「地域の幾世代の方たちからも愛され、信頼される学校づくり」をすすめており、存続運動への共感も広がって、定時制を残して欲しいというのが地元市民の世論になっています。

10月の教育委員会においては一昨年来、各委員の皆様から「（同窓会などの手紙等を読んで）母校への思いはひとしお。一人も取りこぼさないようにしてほしい」「チャレンジスクールや近隣の定時制で受け入れるということだが、通学困難が出るかも知れない」といった発言が出され、感激いたしました。今年も10月に開催される教育委員会において、立川高校定時制の新1年生の募集停止が予告されることのないよう切に願いつつ、お手紙を差し上げる次第です。宜しく願いいたします。

2022年9月9日

東京都立立川高等学校芙蓉会（定時制同窓会）
（連絡先）